

## 補綴歯科臨床における認知行動療法の効果：ランダム化比較試験(RCT)

辻（土井），希美

<https://hdl.handle.net/2324/1806945>

---

出版情報：九州大学，2016，博士（歯学），課程博士  
バージョン：  
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（3）



氏 名 : 辻 希美

論 文 名 : 補綴歯科臨床における認知行動療法の効果：ランダム化比較試験（RCT）

区 分 : 甲

## 論 文 内 容 の 要 旨

認知行動療法（cognitive behavioral therapy : CBT）は対象者の判断、信念、価値観などの認知的要因が個人の情動や行動に及ぼす影響を考慮し、その原因となっている認知の修正を主体とする「認知療法」と学習理論および行動科学の諸理論を治療法に適応する「行動療法」とが統合されたものである。一般的に、うつ病や不安障害など多くの精神疾患に対する効果が実証されており、医科では様々な領域で広く使用されている。歯科では、慢性疼痛疾患、非機能時の上下顎歯の接触や顎関節症の治療における有効性は多く報告されている。しかし、補綴治療患者に対する CBT の効果やメカニズムについては十分に分かっておらず、そうした報告は皆無に等しい。そこで本研究では、歯の欠損という慢性疾患に対して可撤性義歯による補綴治療を行う患者への CBT の効果について検討した。

遊離端欠損に対して可撤性義歯による補綴治療を行う患者 46 名を対象に、介入群（可撤性義歯による補綴治療+CBT）と非介入群（可撤性義歯による補綴治療のみ）とに無作為に割付し、補綴治療前（Baseline）および治療完了の 1~3 か月後に、咀嚼能力の客観的評価（咀嚼能率、咬合接触面積、咬合力）および主観的評価（咀嚼能力への満足度の評価（Visual Analogue Scale : VAS）、口腔関連 Quality of Life（QoL）の評価（Oral Health Impact Profile（OHIP）日本語版）、ならびに心理社会的因子（General Health Questionnaire60（GHQ60）、Profile of Mood States（POMS）短縮版）の評価を行った。介入群への CBT は、顎顔面領域の筋の緊張を緩和し、歯や歯周組織、義歯床下粘膜への負担を軽減することによって義歯への順応をサポートすることを目的とし、リラクゼーショントレーニング（頭頸部筋のストレッチ指導）および行動変容（日中の上下顎歯の接触についてのセルフモニタリング）を指導した。これを治療開始から義歯装着までの間に同一術者により 2 回行った。

その結果、客観的評価のうち咀嚼能率および咬合接触面積については、両群ともに可撤性義歯装着前後で有意な改善を認め、また、両群間に有意差を認めなかった。すなわち、両群ともに同程度の客観的な咀嚼能力の改善を認めた。一方で咬合接触面積については、両群ともに治療前後で有意差を認めなかった。

主観的評価のうち咀嚼能力への満足度の評価（VAS）については両群ともに可撤性義歯装着前後で有意な改善を認め、さらに、介入群の方が非介入群よりも有意に向上した（介入群  $44.1 \pm 22.1 \rightarrow 81.7 \pm 12.3$ 、非介入群  $40.0 \pm 21.9 \rightarrow 61.8 \pm 23.6$ ）。また、口腔関連 QoL の評価（OHIP 日

本語版) については、非介入群では可撤性義歯装着前後で有意差を認めなかったが、介入群では有意に向上した (介入群  $66.6 \pm 37.9 \rightarrow 39.4 \pm 24.9$ 、非介入群  $69.6 \pm 37.8 \rightarrow 53.6 \pm 29.0$ )。すなわち、介入群の方が患者の主観的評価が有意に向上した。

心理社会的因子 (GHQ60、POMS 短縮版) については、両群ともに可撤性義歯装着前後で有意差を認めなかった。

本研究結果より、可撤性義歯装着前後で、両群ともに同様の客観的な咀嚼能力の改善を認め、また、主観的評価については非介入群よりも介入群の方が有意に改善したことが示され、歯の欠損に対して可撤性義歯による補綴治療を行う患者への CBT は、患者の主観的評価の向上に効果があることが示された。